

of Inner Mongolia

【名称】 ^{ないもうご}内蒙古自治区を中心に分布する中国内のモンゴル(蒙古)族の言語。話しことばは、チャハル(Chakhar, 察哈爾)方言の発音をもって口語標準音とし、書きことばは、伝統的な縦書きの蒙古字で表記する現代の蒙古文語を用いる。話者の人口は、推定で330万~340万人である。

中国国内のモンゴル族の言語は、地域ごとに多様な方言からなり、最近まで、規範化された標準語や地方色をもたない共通語は存在しなかった。1980年に、^{シリンゴル}内蒙古自治区人民政府が錫林郭勒盟正藍旗のチャハル方言をもって標準語音の基礎とする旨の決定を批准して、口語標準語の基礎がおかれた。言語名の「内蒙古語」は、以下に述べるように確定的なものでない。

内蒙古語の話し手、すなわち、中国国内のモンゴル族の、民族名の自称は[məŋgɔl], 言語名の自称は[məŋgɔl xəl]で、これは、モンゴル人民共和国のモンゴル族の自称とまったく同じである。歴史的にみても、広義のモンゴル族が、中央アジアに広く分布するブリヤート(Buriat), カルムイク(Kalmuck), ダグル(Dagur), モゴール(Moghol) 等々を含むモンゴル系諸族をさすのに対して、狭義のモンゴル族は、その中で、モンゴル高原に分布する諸部族、換言すれば、現在のモンゴル人民共和国と中国内蒙古自治区を中心に分布するものをさしてきた。言語的にみても、たとえば、モンゴル人民共和国の標準語の基礎方言となっているハルハ(Khalkha)方言と、内蒙古自治区のチャハル方言の差異はわずかであり、相互理解にほとんど支障はなく、両者は同一言語の方言の関係にあるとみなしうる。

しかし、モンゴル人民共和国と内蒙古自治区で、互いに文字体系のまったく異なる書きことばを有し、それぞれが独自の口語標準語を育成している今日、両者を独立の言語とみなすことも可能であり、その立場からすれば、呼称の上でも区別する必要が生じる。その際、問題になるのは、日本語で「モンゴル語」が、すでにモンゴル人民共和国の公用語(すなわち、ハルハ方言に基づいた口語標準語と、1940年代から用いられているロシア字表記の書きことば)を意味して用いられていることである(この場合、「モンゴル語」の「モンゴル」は、民族名としての「モンゴル」ではなく、国名としての「モンゴル」をさしている)。さらに、旧称の「蒙古語」は、モンゴル系の諸言語、諸方言を総称する用語として用いられているという事情がある。

現在、モンゴル人民共和国の「モンゴル語」に対して、内蒙古自治区の口語標準語、書きことばだけをさす特別な名称は、ないと言ってよい。ここでは、「内蒙古自治区」の名称をとって「内蒙古語」とし、その言語的特徴を概説する。なお、「^{うち}内モンゴル語」も同義

で用いることができる。

【文字】 内蒙古語の書きことばは、長い伝統を有する。いわゆる「蒙古文語」(あるいは、「書写蒙古語」ともいう)は、13世紀のチンギス汗の時代に、ウイグル字を借りて当時のモンゴル語を表記したもので、以来、700年以上にわたってモンゴル族の書きことばとして用いられてきた。ソ連邦内のブリヤート、カルムイクの両族、および、モンゴル人民共和国では、今世紀の半ばまでに、相次いで蒙古文語を廃してロシア字に基づく書きことばを採用したのに対し、中国国内のモンゴル族は、この伝統的な蒙古文語を共通の書きことばとして使用してきた。

蒙古字は、表音文字で縦書き、原則として単語ごとに連ねて綴り(名詞の格語尾と所属語尾は、語幹と分けて綴る)、行は左から右に進む。1つの文字で複数の音を表わすものが多く、字形だけでは発音を特定できない場合が多い。その綴り(語形)は、現代のいずれの口語の発音ともかけ離れており、古風な語形と文法形態をその特徴とする(→世界文字編「蒙古文字」)。

一方、新疆ウイグル自治区のオイラト系モンゴル族の間では、書きことばとして、トド(托忒)文字で綴るオイラト文語が用いられている。トド文字は、1648年に、仏僧ザヤ・パండిタ(Za-ya Pandita)が仏典の翻訳と普及のために蒙古字を改良して作製した文字である。1字1音の原則のもとに、字母を増やし、長母音に識別符号をつけるなどして、蒙古文語に存在した読み方のあいまいさを解消したことにより、「トド(todo)」(モンゴル語で、「明瞭な」の意)の名でよばれる(→世界文字編「トド文字」)。オイラト文語は、蒙古文語と同様、縦書きで、行は左から右へ進む。オイラト文語は、語形のみならず、接尾辞等の文法形態も蒙古文語のそれと異なるが、その表記は、必ずしもすべて当時の口語を写したのではなく、部分的に蒙古文語の綴りをとり入れたり、文法形態を単純化したたりした人工的な要素も少なくない。

なお、1982年に、新疆ウイグル自治区人民政府は、同年からオイラト文語の代わりに蒙古文語を導入し、1990年までに全面普及させる旨の決定を批准して、オイラト系モンゴル族の間で蒙古文語の学習を推進している。これも、「内蒙古語」の標準語化の一環とみなすことができる。

【言語特徴】 内蒙古語は、モンゴル諸語の中で、モンゴル人民共和国のモンゴル語と言語的にもっとも近い。内蒙古語の口語標準語の基礎となっているチャハル方言と、モンゴル語の基礎にあるハルハ方言とは、文法形態においてほとんど差異がなく、それぞれの方言での相互理解も容易である。両者の違いは、若干の音声的な差異と、一方で用いられる語句や言い回しで

他方では用いられないものがあるといった、語彙や語法上の特殊性によるものがほとんどである。

羅布桑旺丹(1959)は、モンゴル系諸言語、諸方言の分類で、ハルハ、チャハル、オルドスの3方言を「中部方言」としてまとめ、「東部方言」のホルチン、ハラチン両方言、「西部方言」のオイラト諸方言、「北部方言」のブリヤート語等と対立させた。このように、純粋に言語的な特徴を基準にすれば、チャハル方言とハルハ方言との言語的な隔たりは、内蒙古語内部のチャハル方言と、ホルチン方言、ハラチン方言ないしはオイラト方言との距離より小さいとみなされる。

内蒙古語の口語標準音の基礎をなすチャハル方言の主要な言語的特徴を列挙すれば、次のとおりである。

1) 強勢が常に語の第1音節の母音にあり、第2音節以降の非強勢の短母音は、幾分不明瞭な弱化母音として現われる。弱化母音の音質は第1音節の強勢母音に依存し、その現われる位置は閉音節で安定している。換言すれば、第2音節以降の開音節の短母音が歴史的に消失して、第2音節以降では弱化母音を核とする音節は閉音節化する傾向が著しい。

これにより、音節末の子音結合が発達している。

蒙古文語形	チャハル方言	
amiduraqu	æmdrax	「生活する」
batayana	batgan	「蚊」
ende	end	「ここに」
gereči	gertš	「証拠」

2) 後続する音節の母音 *i の影響で、「ウムラウト化」した母音音素 æ (<*a), œ (<*o) をもつ。

蒙古文語形	チャハル方言	
ami(n)	æm	「生命」
mori(n)	mœr	「馬」

3) 母音の「前進的円唇同化」の現象があり、円唇母音 o, ö のあとに、平唇母音の ā, ē は現われない。

蒙古文語形	チャハル方言	
doluɣa(n)	dolō	「7」
ködege(n)	xödō	「草原」

4) 語末の *n と *ŋ が融合して、[ŋ] で現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	
on	oŋ	「年」
ang	aŋ	「獣」

一方、チャハル方言の語末に現われる [n] は、その直後にあった短母音が弱化、消失したことによって得られたものである。

蒙古文語形	チャハル方言	
baɣana	bagan	「柱」
üne	ün	「値段」
čana	tšan	「スキー」

5) 「不定の n」をもつ名詞語幹では、主格形として、語幹末に鼻子音をもたない形が用いられる。「不定の n」とは、名詞類の一群の語において、格変化の際に、末尾に鼻子音 (<*n) をもつ語幹形とそれをもたない語幹形とが交替する現象である。ブリヤート語やカルムイク語、オイラト方言では、語幹末に鼻子音を伴う形が主格形として用いられるが、チャハル方言では末尾に鼻子音をもたない語幹が主格形となる。

カルムイク語 ブリヤート語 チャハル方言

amən	amaŋ	am	「口が」
kelən	xeleŋ	xel	「舌が」
modən	modoŋ	mod	「木が」
üsen	üheŋ	üs	「毛が」

以上1~5は、モンゴル人民共和国の標準語の基礎となっているハルハ方言と共通した特徴であるが、ハルハ方言と異なる、チャハル方言の目立った特徴は、次のとおりである。

6) 前舌母音に、張り母音音素 i ([i]) と弛み母音音素 i [i] の対立がある。

蒙古文語形	ハルハ方言	チャハル方言	
kira	xjar	xir	「尾根」
kiri	xir	xir	「程度」
ǰira(n)	džar	džir	「60」
ǰil	džil	džil	「年」

7) ハルハ方言の二重母音 aě [aě], oě [oě] に対して、チャハル方言では、長母音の ā [æ:], ē [œ:] が現われる。

ハルハ方言	チャハル方言	
saěŋ	sāeŋ	「良い」
dalaě	dalāe	「海」
oěr	ōer	「近い」
tolgoě	tolgōe	「頭」

8) ハルハ方言では、e, ē が前舌母音 [e, e:] として発音されるのに対し、チャハル方言では、中舌母音 [ə, ə:] として発音される。

en[ən]「これ、この」、dēr[də:r]「上に」(チャハル方言)

9) ハルハ方言の2つの破擦音 ts, tš [tʃ] に対して、チャハル方言では tš が対応し、同様にハルハ方言の dz, dž [dʒ] に対しては dž が対応する。

ハルハ方言	チャハル方言	
tsag	tšag	「時間」
tšaŋg	tšang	「きつい」
dzalū	džalū	「若い」
džar	džir	「60」

10) ハルハ方言の2つの喉音音素 g と G に対して、チャハル方言では、ただ1つの音素 g が対応する。

ハルハ方言	チャハル方言	
gar	gar	「手」
ger	ger	「包」
baG	bag	「小さい」
bag	bag	「仮面」

11) 語頭の硬音 (fortis) t, tš, x が、元来、第2音節頭に硬音 t, tš, s, š, x がある場合、異化して軟音 (lenis) d, dž, g として現われる。

蒙古文語形	ハルハ方言	チャハル方言	
tosu(n)	tos	dos	「油」
čiki(n)	tšix	džix	「耳」
času(n)	tsas	džas	「雪」
qatayū	xatū	gatū	「硬い」

ただし、第1音節に、長母音、二重母音、鼻子音 (m, n, ŋ) が含まれているときは、この異化現象はさまざまげられる。

tōs 「埃」、tšās 「紙」、xiteŋ 「寒い」、xamt 「いっしょに」(チャハル方言)

この特徴は、オールドス方言、内蒙古自治区の茂明安を除くハルハ方言、モンゴル人民共和国内のハルハ方言の東部下位方言にも広く認められる。

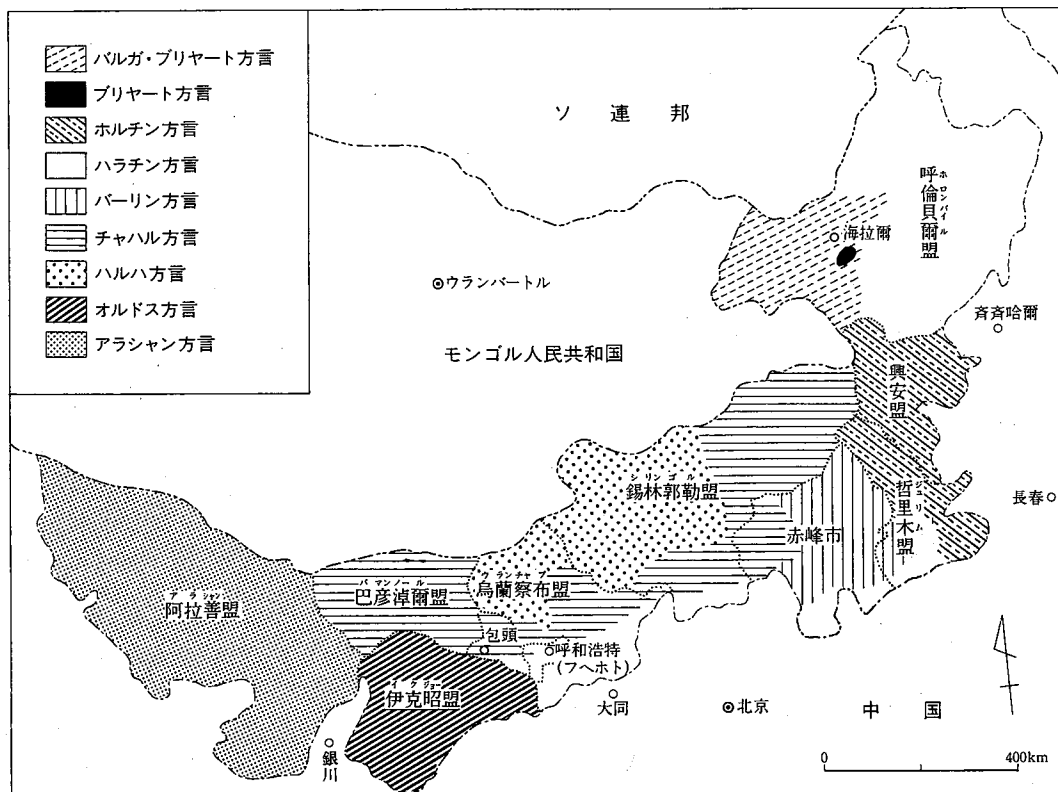
【方言】 内蒙古語の口語方言はきわめて多様である。それらは、I) 西部方言、II) 東北部方言、III) 中部方言、に大別される。

このI~IIIの方言は、さらに、次のような下位方言を含む。

- I) 西部方言
 - a) 新疆方言
 - b) 海西、肅北方言
- II) 東北部方言
 - a) 新バルガ方言 } バルガ・ブリヤート方言
 - b) 陳バルガ方言 }
 - c) ブリヤート方言
- III) 中部方言
 - a) ホルチン(科爾沁)方言
 - b) ハラチン(喀喇沁)方言
 - c) バーリン(巴林)方言
 - d) チャハル(察哈爾)方言
 - e) ハルハ(喀爾喀)方言
 - f) オールドス(鄂爾多斯)方言
 - g) アラシャン(阿拉善)方言

それぞれの方言の分布と主要な言語的特徴は、以下のとおりである(く図)を参照)。

く図) 内蒙古語の方言分布



注：西部方言については、「オイラト語」の項の図を参照。

I) 西部(オイラト)方言は、新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省のオイラト系モンゴル族によって話されている。話者の人口は、推定で14万~15万人である。このうち、新疆方言は新疆ウイグル自治区に行なわれるもので、主な分布地域は、巴音郭楞蒙古自治州、博爾塔拉蒙古自治州、和布克賽爾蒙古自治県である。また、海西方言は青海省の海西蒙古族藏族自治州(旧海西蒙古族藏族自治州)で、肅北方言は甘粛省の肅北蒙古族自治県で話されているものをさす。

西部方言は、ソ連邦カルムイク自治共和国のカルムイク語や、モンゴル人民共和国西部のオイラト系方言に近く、これらをまとめて「オイラト語」とよぶことがある(この方言の言語的特徴については、「オイラト語」の項を参照)。西部方言のうち、海西、肅北両方言は、中部方言に近い特徴をもち、西部方言と中部方言との中間的な方言として位置づけられる。

II) 東北部方言の a, b (バルガ・ブリヤート方言) は、内蒙古自治区の呼倫貝爾盟の西部に居住するバルガ・ブリヤート系モンゴル族によって話され、話者の人口は、推定で2万~3万人である。このうち、新バルガ方言は新巴爾虎左右両旗に行なわれ、陳バルガ方言は陳巴爾虎旗と鄂温克族自治旗のモンゴル族によって話されている。陳バルガは、モンゴル語でホーチン・バルガ(xütšing barag, 「旧バルガ」の意)であり、かつてチブチン(Chipchin)ともよばれていた。

cのブリヤート方言は、ロシア10月革命の内戦時に、ソ連邦のバイカル湖の東(ザバイカル Забайкал 地方)から移住してきた、アガ・ブリヤート族を中心とするブリヤート系モンゴル族の言語で、言語的には「ブリヤート語」(ホリ方言)に近い。話者の人口は、推定5千~6千人で、主な居住地は、内蒙古自治区呼倫貝爾盟、鄂温克族自治旗内のシニヘイ(錫尼河)高原(海拉尔市の南を流れる伊敏河と、その支流のシニヘイ川流域の一带)に集中している。ブリヤート方言の言語的特徴については、「ブリヤート語」の項を参照されたい。

バルガ・ブリヤート方言は、言語的に、モンゴル人民共和国のハルハ方言とブリヤート方言との中間的な特徴をもつ。この方言の主な音声的特徴は、次のとおりである。

1) 前舌唇母音 *ü と *ö が融合して区別がなくなり、ü [u] として現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
üde	üd	üd	「正午」
ödü(n)	öd	üd	「羽毛」

2) 蒙古文語の ǰ に対して、š [ʃ] (母音 *i の前) と s (それ以外の場合) が対応する。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
činar	tšinar	šanar	「性質」
čaγ	tšag	sag	「時間」

3) 蒙古文語の ǰ に対して、dž [dʒ] (母音 *i の前で) と dz (それ以外の場合) が対応する。ブリヤート方言では、これらに ž(z) と z が対応する。

蒙古文語形	バルガ・ブリヤート方言	ブリヤート方言	
ǰira(n)	džar	žar	「60」
ǰalaγu	džalū	zalū	「若い」

4) チャハル方言等の子音 s に対応して、h が現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
sara	sar	har	「月」
nasu(n)	nas	nah	「年齢」

なお、元来、音節末に位置していた *s (チャハル方言等では、同様に s が対応する) に対しては、閉鎖音の d が対応する。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
emüs-	öms-	ümd-	「着る」
ulus	uls	uld	「人々」

5) 二重母音 ai, oi をもつ(チャハル方言では、これに対応して、æ, œ が現われる)。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
sayin	sæŋ	haiŋ	「良い」
oyira	œr	oir	「近い」

また、後続する音節の母音 *i の影響による母音のウムラウト化が未発達で、それに代わって口蓋化子音が発達している。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
ami(n)	æm	am'	「生命」
mori(n)	mœr	mor'	「馬」

6) 語末の *n と *ŋ が融合して [ŋ] として現われるのは、ハルハ方言、チャハル方言等と同様である。

蒙古文語形	チャハル方言	バルガ・ブリヤート方言	
olan	olon	olon	「多くの」
jang	džan	dzan	「気質」

また、バルガ・ブリヤート方言の主要な文法・形態的特徴として、次の諸点があげられる。

1) 奪格形語尾 -hā (-hō, -hē, -hō) を用いる。

gar 「手」+hā—gar-hā 「手から」

gol 「川」+hō—gol-hō 「川から」

2) 述語となる動詞形につく人称語尾 -b (第1人称単数), -bd' (第1人称複数), -š (第2人称単数), -t (第2人称尊称および複数) があるが、人称語尾のつかない形も述語として同様に用いられる。

bišne-b「私は書きます」、bišne-bd'「私たちは書きます」

3) 動詞の過去時制接尾辞 -ā (-ō, -ē, -ō) を用いる。この接尾辞は、形としては、チャハル方言やハルハ方言の「継続形動詞」と同じであるが、過去形としての意味、および、単独で述語となる用法としては、それらの方言の「完了形動詞(-saŋ, -seŋ, -soŋ, -sōŋ)」に相当する。

uŋš-「読む」——uŋš-ā「読んだ」

job-「行く」——job-ō「行った」

4) 「不定の n」をもつ名詞語幹で、語幹末に子音 ŋ をもたない形が主格形となるのは、ハルハ方言、チャハル方言等と共通である。ブリヤート方言では、主格形に子音 ŋ が現われる。

新バルガ方言と陳バルガ方言間の差異は小さい。もっとも顕著な違いは、上記、音声的特徴の4に関するもので、新バルガ方言の子音 h に対応して、陳バルガ方言では x が現われることである。つまり、新バルガ方言の2つの音素 h と x に対して、陳バルガ方言ではこれらが融合して1つの音素 x として現われる。

蒙古文語形	新バルガ方言	陳バルガ方言	
sara	har	xar	「月」
qara	xar	xar	「黒い」
sayiqan	haixaŋ	xaixaŋ	「美しい」

III) 中部方言は、呼倫貝爾盟の南部以南、内蒙古自治区のほぼ全域にわたる広大な領域に分布する。話者の人口も310万~320万人と多い。以下に述べるように、多様な下位方言を擁する。

a) ホルチン方言は、興安盟、哲里木盟(うち、奈曼旗と庫倫旗を除く)、および、黒龍江省の杜爾伯特蒙古族自治县、吉林省の前郭爾羅斯蒙古族自治县のモンゴル族によって話される。部族方言では、科爾沁、杜爾伯特、郭爾羅斯のほか、紮賚特、紮魯特の方言が含まれる。

ホルチン方言の目立った言語的特徴としては、

1) チャハル方言の ü と ö に対して、ほとんどの場合、融合して母音 ü[u] として現われる(ただし、若干の語では ö[e] が現われる)。

蒙古文語形	チャハル方言	ホルチン方言	
edür	ödör	üder	「日」
üde	üd	üd	「正午」

2) 蒙古文語の ě に対応して、一様に摩擦音の š[ʃ] が現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	ホルチン方言	
čayan	tšagāŋ	šagān	「白い」

čegeji	tšedž	šedž	「胸」
čilaɣu(n)	tšulū	šulū	「石」
čola	tšol	šol	「称号」

また、杜爾伯特、郭爾羅斯、紮賚特では、他方言の子音 s に対応して、一様に t が現われるのが特徴的である。

蒙古文語形	チャハル方言	杜爾伯特方言など	
sara	sar	tar	「月」
sonus-	sons-	tont-	「聞く」
času(n)	džas	šat	「雪」

このほか、ハラチン、バーリン両方言と共通の特徴については、下記の c を参照。

b) ハラチン方言は、哲里木盟の庫倫旗、赤峰市の喀喇沁旗と、寧城県、遼寧省の喀喇沁左翼蒙古族自治县と阜新蒙古族自治县等に分布する。旧卓索圖盟の土默特^{トウメト}の方言もこれに含まれ、ハラチン・トゥメト方言とよぶこともある。

ハラチン方言の主要な音声的特徴としては、

1) チャハル方言等の第1音節の母音 u に対応して、多くの場合、二重母音の ua[öa~wa] が現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	ハラチン方言	
ɣurba(n)	gurab	ɣuarab	「3」
uran	uraŋ	uaran	「巧みな」
tusa	dus	tɣas	「利益」

2) チャハル方言等の長母音 ū (<*aɣu) に対応して、より広い長母音 o[ɔ:] が現われる。

蒙古文語形	チャハル方言	ハラチン方言	
aɣula	ūl	öl	「山」
qaɣur-	xūr-	xör-	「炒める」
qaɣučin	xūtšing	xötšin	「古い」

3) チャハル方言と同様、前舌狭母音に、張り i と弛み i の2種類がある。

4) また、Nomura [野村正良] (1957)によれば、蒙古文語の ě に対して、舌背音の tš[tʃ] (母音 *i の前で)と捲舌音の tš[tʃ] (それ以外の場合)が対応し、同じく ğ に対しても、dž[dʒ] と dž[dʒ] が対応している。

蒙古文語形	チャハル方言	ハラチン方言	
ačiya(n)	atšā	atšā	「荷駄」
niɣuča	nūtš	nūtš	「秘密」
ǰira(n)	džir	džar	「60」
ǰabsar	džabsar	džabsar	「隙間」

また、ホルチン、バーリン両方言と共通の特徴につ

いては、下記のcを参照。

c) バーリン方言は、旧昭烏達盟、現在の赤峰市(ただし、同市の喀喇沁旗と克什克騰旗を除く)と、哲里木盟の奈曼旗に行なわれる。部族方言としては、巴林、奈曼、阿魯科爾沁、翁牛特、敖漢の方言が含まれる。これは、内蒙古方言中で、東部のホルチン、ハラチン両方言と、中部のチャハル、ハルハ、オルドスの各方言との中間的な方言として位置づけられる。バーリン方言がチャハル方言と異なる主な特徴としては、次の点を指摘することができる。

1) 語頭の硬音 t, tš, x が、第2音節頭の硬音 t, tš, s, š, x の前で、軟音 d, dž, g に異化して現われる現象がない。

蒙古文語形	チャハル方言	バーリン方言	
tosu(n)	dos	tos	「油」
čiki(n)	džix	tšix	「耳」
qataɣu	gatū	xatū	「硬い」

2) 語末位置で、子音 *n と *ŋ が、それぞれ、n, ŋ として保持されている。

蒙古文語形	チャハル方言	バーリン方言	
kümün	xüŋ	xün	「人」
köbüŋ	xöböŋ	xöböŋ	「綿花」

3) 名詞の連合格接尾辞 -læ 「〜といっしょに」を用いる。

これらの特徴は、いずれも、ホルチン、ハラチン両方言と共通である。

d) チャハル方言は、赤峰市の克什克騰旗、錫林郭勒盟(うち、蘇尼特の左右両旗と阿巴嘎旗を除く)、烏蘭察布盟(うち、四子王旗の北部と達爾罕茂明安連合旗を除く)、および、巴彥淖爾盟のモンゴル族によって話される。部族方言としては、察哈爾、烏珠穆沁、浩濟特、克什克騰、四子王(南部)、烏拉特(南部)の方言が含まれる。

e) ハルハ方言は、錫林郭勒盟の阿巴嘎旗、錫林浩特市(旧阿巴哈納爾旗)、蘇尼特左右両旗、烏蘭察布盟の四子王旗北部と達爾罕茂明安連合旗に分布する。部族方言としては、阿巴嘎、阿巴哈納爾、蘇尼特、四子王、達爾罕(旧喀爾喀右旗)、茂明安の方言が含まれる。音声的な特徴では、モンゴル人民共和国の標準語の基礎におかれているハルハ方言と変わらない。チャハル方言との顕著な違いは、次のとおりである。

1) 蒙古文語の č に対して、tš と ts が対応する。同様に、蒙古文語の j に対して、dž と dz が対応する(チャハル方言には、ts, dz の音がない)。

2) 蒙古文語の ayi(aj), oyi(oj) に対して、二重母音の aě, oě が対応する(チャハル方言では、長母

音 aě, oě が対応する。

f) オルドス方言は、伊克昭盟に分布する。内部の方言的差異は少ない。言語的には、第2音節以降の短母音がよく保存されているのが特徴的である。第1音節に強勢をもつ現代のモンゴル語諸方言のほとんどで、第2音節以降の短母音の弱化が顕著であるが、オルドス方言は、この点で特殊な位置を占めている。

このほか、蒙古文語の k に対して、閉鎖音の k が対応する、語末の *n と *ŋ が、それぞれ n, ŋ として区別される、連合格語尾 -lā (-lē, -lō, -lō) を用いる、等の特徴をもつ。

なお、オルドス方言の言語的特徴の詳細については、「オルドス語」の項を参照されたい。

g) アラシャン方言は、アラシャン盟のモンゴル族によって話されている。部族方言では、アラ善額魯特と額濟納土爾扈特の方言が含まれる。アラシャン方言は、オイラト方言が内蒙古方言化したものとみなされ、一部にオイラト方言的な特徴がみられる。たとえば、母音では、前舌母音と後舌母音の対比が明瞭で、e, ü, ö は、それぞれ [e, y, ø] と発音される(チャハル方言では、それぞれ [ə, u, ə]) ことや、蒙古文語の k に対して、閉鎖音の k が対応することがそれである。また、語末の *n と *ŋ が、n, ŋ として区別される。ハルハ方言と同様、蒙古文語の č に対しては tš と ts が、j に対しては dž と dz が対応している。オイラト方言にみられる述語動詞につく人称語尾はない。

以下、蒙古文語の č, j に対する内蒙古語各方言の対応をまとめて表示する(〈表〉を参照)。

(蒙古文語) (方言)	č		j	
	母音 *i の前	母音 *i の前	母音 *i の前	母音 *i の前
チャハル、バーリン、オルドス	tš		dž	
ホルチン		š		dž
ハラチン	tš	tš	dž	dž
ハルハ、アラシャン	ts	tš	dz	dž
オイラト	ts	tš	z	dž
バルガ・ブリアート	s	š	dz	dž
ブリアート	s	š	z	ž

中国国内のモンゴル族としては、このほか、青海省黄南藏族自治州の河南蒙古族自治県のモンゴル族(約1万8千人)や、雲南省通海県のいわゆる「雲南蒙古族」(約4千人)がいるが、いずれも、言語的には、チベット語や彝語等、周辺の民族の言語に同化しており、

モンゴル語系統とは認め難い。

〔辞書〕

- 1) 内蒙古大学蒙古語文研究室編 (1976), 『蒙漢辭典』 (内蒙古人民出版社, 呼和浩特)
- 2) 内蒙古自治区社会科学院蒙古語言文字研究所編 (1983), 『漢蒙詞典』 (内蒙古人民出版社)
- 3) 布林特古斯編 (1977), 『蒙語正音正字詞典』 (内蒙古教育出版社, 呼和浩特)

1は現代蒙古文語-中国語辞典, 2は中国語-現代蒙古文語辞典で, いずれも類書中, 最大, 最良のもの。

3は, 現代標準語の発音・正書法辞典である。

口語方言辞典としては, 次のようなものがある。

- 4) Ramstedt, G. J. (1935, 1976²), *Kalmückisches Wörterbuch* (Lexica Societatis Fenno-ugricae III, Société Finno-ougrienne, Helsinki)
- 5) Mostaert, A. (1941-44, 1968²), *Dictionnaire ordos I-III* (Peking; 2nd edition, Johnson Reprint Corporation, New York/London)
- 6) 武達等編 (1983), 『巴爾虎土語詞彙』 (蒙古語族語言方言研究叢書 003, 内蒙古人民出版社)

4は中国国内だけでなく, オイラト諸方言全体にわたる辞典, 5はオルドス方言の辞典である。いずれも口語辞典として, 質量ともにすぐれ, モンゴル口語研究史における双壁をなす。6は陳バルガ方言の語彙集で, 5,600余の語句を含む。

〔参考文献〕

1) 文法書

- 内蒙古大学中国語言文学系蒙語教研室編 (1964), 『現代蒙古語』上, 下冊 (内蒙古人民出版社) (蒙文)
- 清格爾泰 (1979), 『現代蒙語語法』 (内蒙古人民出版社) (蒙文)
- 道布 (1983), 『蒙古語簡志』 (中国少数民族語言簡志叢書, 民族出版社, 北京)

2) 方言分類

- 野村正良 (1941), 「蒙古語の口語特に内蒙古の口語に就いて—蒙古語比較音韻論への若干の寄与—」『民族学研究』7 (2) (東京)
- 羅布桑旺丹 (1959), 「關於現代蒙古諸語言, 方言的分類問題」『北京大學學報 (社会科学)』2期 (北京)
- 清格爾泰 (1979), 「中国蒙古語方言的画分」上, 下, 『民族語文』第1期, 第2期 (中国社会科学出版社, 北京)
- 孫竹 (1985), 「論我国家蒙古族語言」『蒙古語文集』 (青海人民出版社, 西寧)
- Todaeva, B. Ch. (1960), "Mongolische Dialecte in China", *Acta Orientalia* X, 2 (Budapest)
- Тодаева, Б. Х. (1960), *Монгольские языки и диалекты Китая* (Издательство восточной

литературы, Москва)

3) 口語方言の記述, 資料

a) 全体的なもの, 複数の方言にわたるもの

- Руднев, А. Д. (1911), *Материалы по говорам восточной Монголии* (Санкт-Петербург)
- Тодаева, Б. Х. (1981), *Язык монголов Внутренней Монголии, Материалы и словарь* (Наука, Москва)

——— (1985), *Язык монголов Внутренней Монголии, Очерк диалектов* (Наука, Москва)

服部四郎 (1937), 「ホロンバイルの蒙古語」『蒙古学』第1号 (東京; 『服部四郎論文集』第1巻, 三省堂, 東京, 1986所収)

b) バルガ・ブリヤート方言に関するもの

- Poppe, N. (1931), "Skizze der Phonetik des Bargu-burjätischen", *Asia Major* VII (Leipzig)
- 服部四郎 (1940), 「ブリヤート方言の分類」『蒙古学報』第1号 (東京; 『服部四郎論文集』第1巻所収)
- 武達等編 (1983), 『巴爾虎土語話語材料』 (蒙古語族語言方言研究叢書 002, 内蒙古人民出版社)

c) ホルチン方言に関するもの

- 孫竹 (1985), 「現代蒙古語科爾沁方言」『蒙古語文集』 (青海人民出版社)
- 碩精扎布 (1982), 「科爾沁土語元音音位的某些特点」『内蒙古大學學報, 哲学社会科学(蒙文版)』 (呼和浩特)

d) ハラチン方言に関するもの

- 野村正良 (1941), 「蒙古語喀喇沁右旗王府方言の短母音」『民族学年報』第3巻 (東京)
- Nomura, Masayosi (野村正良) (1957), "On Some Phonological Developments in Kharachin Dialect", *Studia Altaica* (Festschrift für Nikolaus Poppe zum 60. Geburtstag am 8. August 1957, Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

呼格吉勒圖 (1987), 「蒙古語喀喇沁土語音系統」『民族語文』第4期

e) バーリン方言に関するもの

- Činggeltei [清格爾泰] (1959), *Mongγul kelen-ü baγarin-u aman ayaluγun-u abiya-yin jüi ba üges-ün jüi* (『蒙古語バーリン方言の音論, 形態論』) (Dumdadu ulus-un sinjilektü uqayan-u küriyeleng-ün tölügelegčid)

f) チャハル方言に関するもの

- 服部四郎 (1951), 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』第19/20号 (東京; 『服部四郎論文集』第2巻, 三省堂, 東京, 1987所収)
- 孫竹 (1985), 「察哈爾方言音研究」『蒙古語文集』 (青海人民出版社)

なお、オルドス方言、西部(オイラト)方言、オイラト文語の文献については、「オルドス語」「オイラト語」の項の参考文献を参照されたい。

【参 照】 モンゴル諸語, モンゴル語, オイラト語, オルドス語, ブリヤート語

(栗林 均)